普及シンポジウム

Day 1

国内スポーツシステム開発（Development of a National Sport System = DNSS）

https://www.sailing.org/inside-world-sailing/activities-services/training-development/for-mnas/dnss/

2023 年頃から WS の Development of a National Sport System (DNSS) プログラム利用して国内のトレーニングプログラムを策定し、国内にインストラクタープールを作るところから普及を進めている事例の紹介として、スロバキア連盟副会長の Barbora Bachrata とアイスランド連盟会長 Ulfu H. Hrobjartsson からプレゼンテーションがあった。どちらにも共通しているのは：

- 国内に既存のシステムがあり WS プログラム受け入れへの抵抗が強かった
- 受け入れ決定後は既存システムとの整合性を図る必要があった
- 共通の文書を用い、メソッドを同じくするインストラクターにより統一したスキルと知識の継承をしている
- ライセンス（イントラ、安全）やメディカルチェックなどを保有し一定基準を満たすクラブの維持に工夫が必要

ということであった。

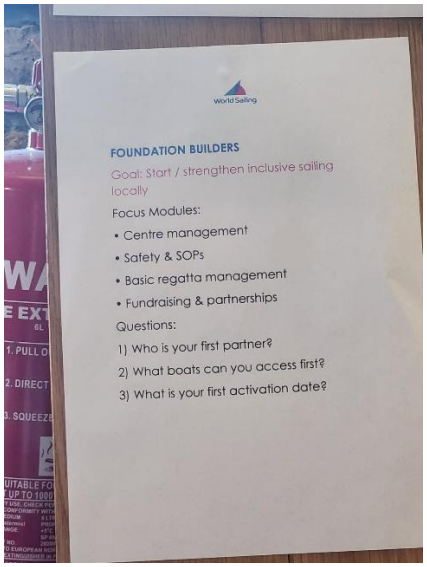
インクルーシブ開発プログラム（Iinclusive Development Program）

https://www.sailing.org/parasailing-development/

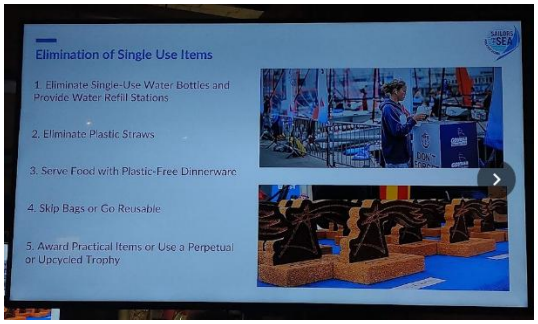
IDP は、シンプルで柔軟なモジュール式の仕組みにより、地域の実情に合わせてプログラムを組み立てながらインクルーシブ・セーリングの出発点を作る取り組みである。目的は、地域レベルのセーラビリティイベントや単発クリニックを、全国的・国際的な参加機会につながる体系的な育成／参加プログラムへと発展させ、セーリングへの参加とアクセスを拡大することにある。人々がセーリングを体験し、楽しみとしても競技としても道筋を理解できる機会を提供し、障がい者セーリングを特別枠ではなく「誰もが参加できるスポーツ」として位置づけ直す点は、パラセーリングのパラリンピック復帰を目指す現状において特に重要である。IDP は無料で利

用でき、地域団体や既存リソースと協働して進めるため、資源の豊富な国だけでなく幅広い地域での実装を想定している。内容は基礎（運営体制・標準手順・レガッタ運営・資金調達・装備等）、コーチング（包括的指導法の習得）、パフォーマンス（国際大会やパラリンピックを目指す選手支援）の 3 レベルで構成され、持続的な成果＝レガシー創出を重視する。シンガポールでのパイロット版には 13 か国 34 名が参加して成功し、その成果を「アジア・インクルーシブ・セーリングシリーズ」に繋げた。第 1 回大会（2024 年シンガポール）には 10 歳から 77 歳まで多様な障がいのある参加者が集い、アクセスのしやすさ、普遍性、協働という IDP の理念を体現した。

上記紹介の後、「理想の IPD」を考えるワークショップがあった。会場内に「I haven’t got a clue（全くどうしてよいか分からない」」「Foundation」「Coaching」「Regatta management」など複数のステーションが設けられ。それぞれに質問やワークシートに基づいてディスカションが行われた。



クリーン・レガッタ & クラス



https://www.sailing.org/inside-world-sailing/sustainability/clean-regattas-and-classes/

Sailors for the Sea が推進するクリーン・レガッタ＆クラスというプログラムの紹介とワークショップ。使い捨てプラスチック削減、コミュニティエンゲージメント、リサイクル向上、環境保全、気候変動へのアクションを喚起するもので、WS を冠する大会ではプログラム導入が必須。

ロイヤル・アイルランド・ヨットクラブ

Royal Iceland Yacht Club は世界で初めてアマチュアのヨットレースが行われたところで、シングルハンドレースやダブルハンドレース、シリーズレースの発祥地でもある。熱心なセイラーで 1872 年のシングルハンドレース中に命を落とした Daniel O'Connell の肖像画が今でもラウンジに飾られている。主要なクラブは年に 1 回のレガッタで 1 ～2 回のレースを行うだけだった当時、オーバーナイトのシングルハンドレースが行われていたのは特記事項。

活動的なセイラーアルフレッドが作成したヨットの法（Laws of Yachting）という包括的な規則は、1875 年にヨット・レーシング協会（Yacht Racing Association）採用され、セーリング初の全国組織となった。

他にもいくつか世界最古のレガシーがある。世界最古のワンデザインクルーザー・レース・クラス「ダブリン・ベイ・ワンズ」、世界初の通勤型郊外であり、中流階級の専門職・商業関係者が多く住み、彼らがセーリングを始め、その発展を支えた。「ヨットレースのゆりかご」というタイトルに、ヨット史の専門家で異論を唱えるものはいない。

Day 2

スポンサー獲得について異なる立場からの視点での考察

ワールド・マッチレース・ツアー主催者 James Pleasance、イタリアセーリング連盟副会長 Giuseppe D'Amico、商業パートナーである Metazone ファウンダーJevan Tan によるパネルディスカション。

潜在スポンサーの目に留まるアピールとは何か、セーリングが知られていないためスポンサーにセーリングの一から教育が必要になるがその分機会もある（選手の所属しているクラブがあり、そこにメンバーが〇〇人いる、など）、デジタル改革（活用できるデータを得るためであることが多い）、データ活用、連盟にマーケティングチームを設けることの有益性について議論された。またグローバルスポンサーと大会スポンサーの利益相反、企業にアピールする際に文化の違いを考慮することの必要性などに言及した。

Day 3

貧困や障害などで脆弱な立場にある子供達を支援する The Little Optimist の紹介

https://thelittleoptimist.org/

困難な環境にある子供達が「生き抜き（Survive)」、さらに「成長して羽ばたく（Thrive)」ための心の土台をつくることを目的とするチャリティ団体の紹介。2019年には世界最大のレジャーマリンイクイップメントの展示会 METS で DAME チャリティーアワードを受賞している。

https://thelittleoptimist.org/little-optimist-receives-international-charity-award/

創設者グレッグ・バーティッシュの実体験と『The Little Optimist』の教えを軸に、楽観性・前向きな思考・レジリエンス（回復力）を育むプログラムや講演、書籍・映像などを通じて、子どもたちが現在の状況に縛られず希望を持てるよう支援する。
加えて、セーリングを用いた「セーリング・セラピー」により心身の癒しや自己肯定感、協調性を高める体験の場を提供し、特に貧困や健康上の困難、障がいなどで脆弱な立場にある若者を主な対象としている。
さらに、医療・教育施設や保育関連の現場を改修・美化するプロジェクトを資金支援し、安全で明るい「居場所」を整えることで、子どもたちの生活環境そのものも底上げする。

https://www.instagram.com/littleoptimist/

Day 4

ユースからインストラクターへのパスウェイに注力する Netley Sailing Club の紹介

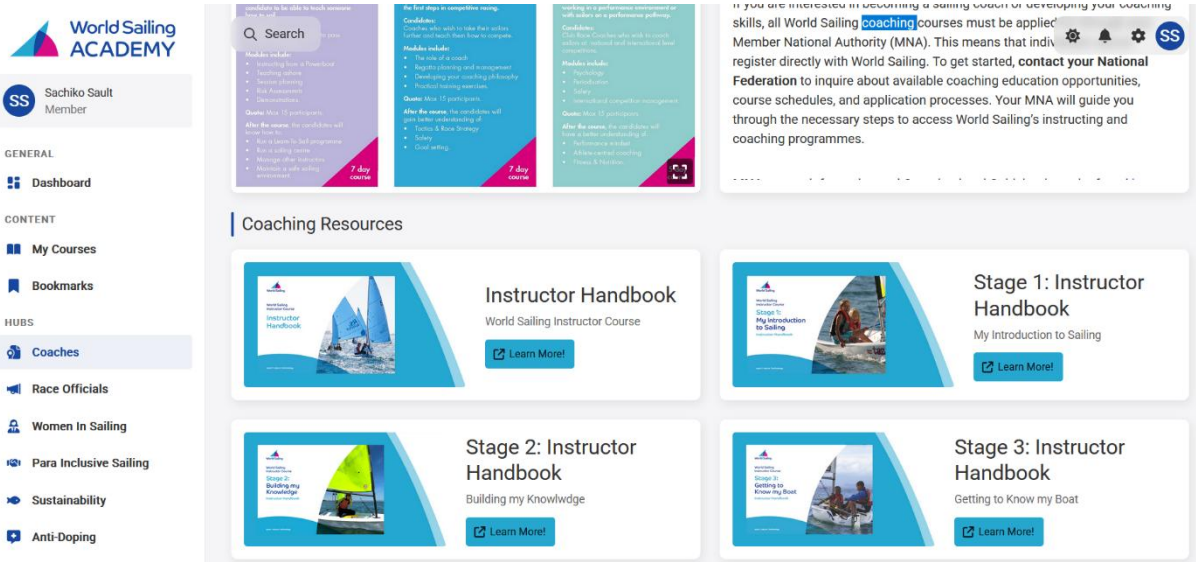
https://www.youtube.com/watch?v=Opz-IBZdQe4

英国南岸でユースのインストラクター養成に力を入れサステナブルな運営を行う、RYA フラッグシップクラブに認定された Netley Sailing Club の取り組みが紹介された。Learn to Sail レベルを終えた若手セイラーが、次世代の子供達の育成を担うことで自信をつけ、リーダーリップ、チームワーク、コミュニケーション力、問題解決力、創造力を習得していく過程で、所属クラブのオーナーシップを身につける。

Day 5

ワールドセーリングアカデミーの紹介

https://www.sailing.org/world-sailing-academy/



ワールドセーリングアカデミーというオンライン講座がローンチされた。内容はコーチング、レースオフィシャル、パラインクルーシブ、女性支援、セーフガーディングなど、セーリングを支えるためのスキルを網羅している。各国に既存のスキームにとって代わるものではなく補完的教材という位置づけ。オンラインで誰でもサインアップすることができる。現在トライアル中のためフィードバック募集中。ポータル内で多言語切り替えもできるようにするため、翻訳を希望する各国連盟からの問い合わせを受付中。